

『パキスタンは知る人ぞ知る、トレッキング大国である』と先レポートに書いたが、トレッキングができるのは、山があるからこそである。

パキスタンは、ヒマラヤ山脈、カラコルム山脈、ヒンドークシュ山脈の3つを擁する世界の屋根なのだ。

だから北パキ最大の魅力は山にあるといってもいい。

ただ、そのベースとなる場所に、【フンザ】なる場所があり、【風の谷のナウシカ】の舞台になった場所と噂されている。

そんな素晴らしい場所ならば、山の“ついで”に見たいと思うのだが、またもや【風の谷のナウシカ】を見ていないので、どの辺が似ているのか、行っても分からないに違いない。

しかも【ナウシカ】なる主人公は女性だって事すら知らなかった。

まっ、谷はともかく、やはり男のロマンは山である。

フンザへ

ギルギットからフンザまではバスで2~3時間である。

例によって、満員になったら発車、という途上国にはありがちのスタイル。午前中には何本か出るが、午後になるとめっきり数が少なくなってしまう。

地元の人から、ギルギットの人口は40万人、フンザは6万人と聞いたが、実際にはその10分の1ぐらいしか人がいないんじゃないかと思うほど、北方の辺境の地である。

私が乗ろうとしていたバスも、なかなか人が集まらず、結局は乗合タクシーに乗り換える事になった。

距離はたいしたことないが、標高1500メートルのギルギットから、2500メートルのフンザまでは結構な坂道を上がっていく。



ギルギットではまだ緑が目立っていたが、フンザでは既に紅葉が始まっていた。

恐らく4000メートル級と思われる近くの山々は、既に雪が積もっている。

乗合タクシーを降り、重たい荷物を持って歩き始めると、何だか息が苦しく、空気が薄い事を感じさせる。2500メートル、日本では、この標高で、どこかに人は住んでいるのだろうか。

2400メートルを越えると、人によっては高山病の症状があらわれると聞いた事がある。私の場合には、喉がとても渴くぐらいで軽微である。

ああ、ビールが飲みたい。



いわゆる【風の谷】。丁度紅葉の季節だった。この標高は2500メートル。急に運動すると息が切れる。

イスラム教と言うと、シーア派が有名だが、このフンザではイスマイルと呼ばれる宗派の1つを信仰している人が大多数らしい。私がフンザに着いたその日は、そのイスマイル派の最高宗教指導者が30年近く前にこのフンザを訪れた日だったらしく、爆竹や花火でバンバンドンドンと賑やかだった(時折、バーンとすごいのがあったが、どうもそれは雪崩れを意図的に起こしているダイナマイトらしい。ここはちょっと歩くと、氷河がある場所なのである)。

このイスマイル派、有り難い事に、イスラムの中では戒律がかなり緩やかで、ラマダンのこの時期でも、日中、村人は平気でご飯を食べている。

もしや、と思いこの街で一番の高級ホテルに行ってみると、あったあったビール。

ところが・・・値段は600ルピー(1071円)。

なめている。この値段は、悪名たかきシンガポールより高い。現在、泊まっている宿の5泊分、いつも飲んでいるミルクティだと実に120杯分である。さすがにビールは飲めない。

しかし、さすが戒律の緩いフンザである。

ここにはフンザワインとフンザ焼酎があるというので早速頼んだ。結局飲めたのは3日後。というのも何れも村人が作って飲む密造酒だから、なかなか手に入らないらしい。

フンザワインはブドウから作っているらしいが、1.5リットルで700ルピー(1250円)。途上国にしては高いが買えない事はない。

しかし味見をしてみると酸っぱくて飲めたもんじゃなかった。もう2週間もすると酸っぱさが消えて、アルコールの度数が上がってくるそうだが、その時にはもういない。

次にフンザ焼酎。こちらは杏から作るらしい。フンザの杏は有名でとても美味しい。その杏から作った焼酎はまあまあ。アルコール度数は20%弱と思う。1.5リットルで500ルピー(893円)。

ただ現地の人曰く、『作り手によっては、車のバッテリーに入れるやつを使う』という話だ。

たぶんジエチレングリコールの事だと思う。バッテリーには不凍液として、酒には防腐効果と若干の甘みをもたらすものだった気がする。昔は安い輸入ワインなんかに入っていたが、肝臓がなんか悪い、というデータが出て、ジエチレングリコール入りワインが、日本では20年ほど前に輸入禁止になったのを覚えている。

手に入れた酒は、マゼモノ無し、と聞いていたが、少しだけにしておいた。

フンザの暮らし

フンザは、ナウシカ効果もあって、実に人気のスポットである。

いわゆる日本人宿が3軒もあって、シーズンには日本人であふれているそう。このシーズンとは、学生が春休みや夏休みという意味で、紅葉が実に素晴らしい今は、オフシーズンと呼ばれるらしい。

それでもフンザ自体のベストシーズンは年に2度。この紅葉の季節と、杏の花が咲く春で、そ



遠くの山々は4000メートル以上あり、雪を被っている。その雪解け水が、このフンザを潤している。

それはそれはとてもきれいらしい。フンザを桃源郷と呼ぶ人もいる。

そんな訳で、現在は多くないが、それでも10人近い日本人が紅葉を楽しみにやって来ていた。一方、中東にあれほどいた韓国人旅行者がここにはいない。

2年ほど前には、フンザは日本人と韓国人で一杯だった、と友人に聞いていたが、今は一人の韓国人にも出合わない。なんでも最近パキスタン政府が、韓国人へのビザ代を一気に値上げしたというのがその理由らしい。嘘かほんとかよく分からないが160ドルだそうだ。たしかにこの金額なら普通の旅行者は寄りつかないはずだ。

しかしこのフンザ、実に居心地がいい。眺めがいいし、空気がうまいし、そしてあまり金が掛からない。ある日の私の支出はこんな感じ。

支出	ルピー	円	コメント
宿	120	214	スリーベッドの部屋をシングルで使用。ドミトリーだと50ルピー。
ミルクティ	25	45	さすがにパキスタン。お茶が美味しいこと。因みにポットに入ってこの値段。5杯分くらいある。
昼飯	55	98	近くのレストランに行き、ビールカレーとコーンスープ、チャパティを頼んだ値段。ちょっと贅沢なランチという感じ。
水	25	45	1.5リットルのペットボトルの値段。パキスタンではどこでもこの値段。ただフンザは水も豊富で、レストランでは自然の水をろ過して普通に飲んでた。
夕飯	70	125	宿が出してくれる夕飯。お茶、サラダ、スープ、料理2品、ライスに加え、食後のプリンがついてこの値段。
インターネット	40	71	私が行った日に、新しいネット屋がオープン。1時間で40ルピー。以前は、何と600ルピーだったらしい。
合計	335	598	

節約派の人は、恐らく半分の費用で過ごしていると思う。

今頃のフンザの商店街は、もう観光客が少ないせいか閑散としている。しかし寂しいという雰囲気よりは、のんびりとしていると言った方が適切な気がする。

お土産屋さんの店先には、ショールや絨毯、フンザ帽などがたくさん飾ってあるが、お店の人は何故かいない事が多い。だから買い物できない事もある。

お店の主人は、たいてい他の店先でゲームやランプをしていたり、レストランでテレビを見



フンザの商店街。といってもお土産屋さんや雑貨屋さんが並んでいる程度。なんか素朴でいい感じ。

入っていたりするのだ。

もう冬支度で、あと1週間で店を閉めると言っている店も多かった。2ヶ月か3ヶ月、冬の間はお休みなんだそうだ。

この人たちの最大の特徴は、『あれ買え、これ買え』としつこく勧めない事と、割と正直で素朴な事。よかったらど~お、とのんびり構えている。また文房具やトイレットペーパーから始まって飲み物、レストラン、床屋に至るまで、日常のものは全くボツてくることはない。至ってまっとうな商売をしている。

もちろんお土産屋で売的高级ショールみたいなものは、大きく利益を乗せて言ってくる。時にはドルで言ってくる。ここまでは普通の街のボルお店と同じなのだが、

『あっちのお店ではこの値段だったよ』と適当な事を言うと、

『品質が違うんだけどなあ、うちの値段はよそで言わないでよ』とか言いつつ値段を一気に下げてくる。それどころか、

『もうシーズンオフだしさあ、オジサンは利益は確保するからさあ、これ一体幾らで仕入れたの？ 帳面とかあるでしょ？』と聞くと、

『今まで見せたことないんだけどなあ』と言いつつも、購買リストを見せてくれたりする。

また、フンザに唯一ある両替商のレートが、日本円の場合には異常に悪いので、お土産屋さんで、

『この新聞にはこう載ってるさ。買い物するからこのレートでやってよ』とお願いすると、

『それは都市部のレートで、この田舎のフンザでは日本円が弱いんだよ』と言ってくるが、

『オジサン、冬の間イスラマバードとか行くでしょ。そこで換えたらいいよ、あのエクステンジ屋じゃ損するさ。日本円は上がっているしね』とアドバイスし、

『お釣もこのレートでね』というと、それが結構通ったりする。さらに、

『もう1ルピーたりとて負けない』というお土産屋さんに対し、『OK。じゃあ昼飯おごって』というご馳走してくれたりする。

何か、こうやって書いてみると、私がとんでもなく悪い人間の様な気がしてくるが、もちろん向こうもプロだから、損する値段では決して取引きしていない。

と、そう思うんだけど、たまにこちらが不安になるほど正直で素朴なのである。

もう少し自分の名誉の為に言っておくと、私はこの村とこの村の人々が大好きなので、できるだけここでお金を落とそうとして店々に通うのである。どの国でも買えるような土産物だったら、何も旅の途中で買わない方が賢いのだ。

だから土産物以外では、他の街と違ってここでは、言い値から決して値切らない事にしている。

レストランに入れば、『そのカレー大盛りね』と言うし、喫茶店でケーキを買えば、『飲み物はサ



何でもパシュミナとかいうブランドのショールが多い。パキスタンはイスラムだから良いショールが多いんだそうだ。

ービスね』と言い、きちんと定価で払うことにしているのである。立派だ(日本人をおとしめないで下さい、という声が何故か聞こえるが)。

さらにはスズキ(パキスタンの乗合タクシー)に乗れば、同じ料金だから降り場をわざと乗り過ぎたり、床屋に行けば、丁度いいのにもっと切ってくれとお願いし、おかしな頭になったりする(因みにスズキは5ルピー(9円)で、値切り様もない)。

売買を通して、私はこの村の人とかなりデープな付き合いをしていると言っていい。訳が分からないほど立派だ。



パキスタンの庶民の足、"SUZUKI"。日本のスズキの軽トラを改造して10人程度乗れるようになっている。

フンザの教育

私が貢献しているのは、実は経済面だけではない。それは教育である。

先レポートでも書いた様に、パキスタンの識字率はとても低い。これに代表されるように、この国の教育レベルは高いとは言えない。というか、やはりだいぶ低いらしい。

読んだ本の受け売りだが、インドの博士号授与が年間2500人に対し、パキスタンでは25人だそうである。

ただし、このフンザだけは別で、イスマイル派の指導者アガ・ハーン氏が個人的な基金で教育の普及を目指しているようだ。

だからフンザにはたくさんの学校があり、遠くから生徒が通ってくる。

村の学校が終わると、小学生から高校生までの生徒が、高台にある学校から大挙して坂を下りてくる(たまに老け顔もいるので、大学生ぐらいの学生もいるのかもしれない)。

パキスタンでは小学1年生から英語を習うらしい。

私はと言えば、その子供たちから『How are you?』と毎日の様に挨拶される。格好の英会話の相手である。

歩いてきた小学1年生7人から、7連続で『How are you?』と言われ、7連続で『Fine, thank you. How are you?』と返すが、一人も答えてくれない目に遭った。まだそこまでしか習っていないのかもしれないが、罰金を食らわせたいくらいである。



習ったばかりなのか、How are you?と順番に聞いてくる。でもまだその先は習っていないのか、会話はここまで。

アガ・ハーン氏は女性の地位向上も目指していて、この村には緑のセーターに白いスカーフという姿のなかなか色っぽい女子高生も多く歩いている。

女子高校理科1級の教員免許(本人の希望により男子を教えることも可)を持っている私としては、くそ餓鬼、いやかわいい小学生だけでなく、女学生ともお話ししたいものである。

学校と言え、村のはずれには、「長谷川メモリアルスクール」という私立の学校がある。登山家の長谷川氏がこの地で雪崩に巻き込まれ遭難し、故人の遺志を継いだ婦人が学校を建てたものだ。400人近い生徒がいるらしい。

またこの地では、日本の援助で公衆衛生のプロジェクトがあったらしい。

そんな訳で、フンザでの日本人の評判はとても良い。誰もが日本人に対して好意的でやさしいのだった。

ビールは飲めないけど、フンザが大好きになった。

ナンガパルバット攻略

冒頭で“男のロマンは山である”とか書いている割には、全然山の話になってこないと思っている人もいるに違いない。

焦ってはいけない。山に焦りは禁物である。

ついでに言えば、もう1つ触れていない話題がある。遺跡である。ここに来た観光客は、必ず【バルティット・フォート】という城塞に行く。1990年から3億円近く掛けて修復された遺跡で、古い部分は13世紀のものだそう(この修復も、アガ・ハーン氏の基金らしい。たいそう立派なお方だ)。

このフンザの観光名所の話題にも触れていない理由は、自慢じゃないが行っていないからだ。

やはり、狙いは1つ“山”なのだ。

ふっふっふっ・・・。

実はこの文章を書いている段階で、実は既に【ナンガパルバット】を攻略した後である。

ベースキャンプ(以下“BC”)を出て一週間。長く、厳しい登りの道のりであった。

以下は、その攻略記録である。

世界で9番目に高い山

パキスタンで“山”と言え、【K2(8611m)】もしくは【ナンガパルバット(8126m)】である。世界第二位と世界第九位の山で、パキスタンでは第一位と第二位である。

だいぶ以前、八ポンという国で第一位のフジヤマと呼ばれる山に登ったが、軽~く山頂に着いてしまった。聞けばたった3777mしかないらしい。

山頂近くになって、ポテトチップスの容器は多少膨らんだが、他の容器は全然膨らまない。よく分からないがO₂と書いてあって膨らみそうな感じなのに・・・(もしかすると、少しずつ漏れていたのかもしれない)。

ともかく、この程度の標高では気圧低下も大したことないという事であり、話にならない。やはり狙うは8000メートル級の山々である。

詳しく調べてみると、世界最高峰のエベレスト(8848m)は、案外簡単にその姿を見られるらしいが、このK2は実に山奥深くにそびえていて、なかなか見る事が出来ないらしい。

そんな山の攻略こそが、男のロマンである。

しかしガイドブックによれば、イスラマバード発の K2 のツアーは、何と 18 日間のスケジュールが組まれている。しかもそれはトレッキングだったりする。

そう言えば、知人がいつか行ってみたいと言っていた。日本からだと K2 トレッキングは 60 万円のツアーだそうである。期間は 3 週間らしい。

おっと残念だ。今回のビザは 1 ヶ月しか取らなかった。しかも既に 10 日経っている。実に残念だ。あきらめきれないが致し方がない。山に無理は禁物である。

となると、残りはナンガパルバットである。

詳しく調べてみると山頂の酸素濃度は 21%らしい。5 分の 1 しかないと思うと不安だが、いつも吸っているのも 5 分の 1 だ。まあ何とかなるだろう。

しかし登山料を聞いて驚いた。7 人のパーティで 9500 ドルだそうである。残念だ。9500 ルピーなら 1 万 7 千円なので何とかなるのだが、ドルだと圧倒的に無理である。ドルの暴落を楽しみに待つしかない。実に残念だが今はあきらめよう。山に無理は禁物である。

となるとトレッキングとなる。トレッキングでは、登山家としての私の名が生きてこないが仕方がない。

このトレッキングは、4 泊 5 日の『本格的なトレッキング』だそうである。

途中のチラスという村を通るのだが、この時期は雪がたくさん降るらしい。そういえば先週チラスに行ってきた日本人が、何日間かこの村に閉じ込められたという。出るに出れなくなる村という噂だ。たった 4 泊 5 日のトレッキングで、例えば 10 日間も閉じ込められようものなら、何をしに行ったのか分からない。

『本格的な』という言葉もちょっと怖い、いやトレッキングごときで『本格的』とは何だかいかかわしい。実に残念だがあきらめよう。トレッキングさえできないとなると、冒険家としての私の名が生きてこないが仕方がない。山に無理は禁物である。

そんな訳で、宿を出て 400 メートルほど坂を上った土産物屋に毎日通り、ついに 200 ルピーの T シャツを、一週間かけて 110 ルピー(196 円)に値切る事に成功。

【ナンガパルバット T シャツ】攻略である。

追伸：文が冴えないのは、このフンザの標高が 2500m で、酸素濃度がたったの 21% だからである・・・。
(いつもとおんなじやんけ)。

つづく



【ナンガパルバット】T シャツ。なくしたり捨てたりで、T シャツが 2 枚しかなかったの、安く買えてよかった。